

趣味的サークルのもたらす満足感とその存在意義について

Satisfaction Through Participation in 'Hobby Clubs' and the Significance of their Existence

—集团的余暇活動に関する調査の分析から—
Analysis of Research on Collective Leisure

中溝 一仁
NAKAMIZO Kazuhito

In Japan, it is often said that the traditional regional society has collapsed. Many big city residents do not know their neighbors. Under these circumstances, people are losing their reference group or their frame of reference according to R.K. Merton's terms. I propose that 'hobby clubs,' which are voluntary groups, play a certain role in society. These clubs might not be a substitute for a reference group, but they might be helpful in satisfying people's needs. Therefore, my hypothesis is that participating in 'hobby clubs' enhances people's life satisfaction. My research is focused on collective leisure. The results of my analysis proved my hypothesis to be right. That is, satisfaction of the participants is relatively higher than non-participants, and therefore it shows that 'hobby clubs' play a certain positive role in society.

キーワード：趣味的サークル (hobby clubs)、自発的参加型集団 (voluntary groups)、集团的余暇活動 (collective leisure)、準拠集団 (reference group)

1. はじめに

戦後の日本において、地域社会の崩壊が叫ばれて久しい。私たちは高度経済成長を経て、物質的には非常に豊かになった。しかし、町内や近所の人との関係は次第に希薄になっていき、「隣の人は何する人ぞ」という言葉が表すように都市は非常に匿名性の高い社会になっている。人間が社会的動物であるとするならば、何らかの集団に所属したいと思うことはまったく不思議なことではない。そして、実際に人は家族や学校や会社など様々な集団に属している。しかし、現代に生きる人々にとって、伝統的な地域社会という一つの帰属集団を失いつつあることは間違いない。マーソンの言葉を用いれば、それは「準拠集団：reference group (Merton 1949 p. 279)」が与えていた「準拠枠：frame of reference (Merton 1949 p. 291)」の喪失ということになるだろうか。準拠集団はその成員に行動規範となる準拠枠を与えるものだが、これが現代社会において失われつつあるように思われる。

社会のもう一つの側面に目を向けると、急激に進行する高齢化社会という現実がある。豊富な食料や医学の発展は人々に健康で長い「定年後」を提供する。このいわゆる「第二の人生」をどのように過ごすかという問いは、個人にとっても社会にとっても重要な問題

である。つまり、たとえ健康で自由な老後であっても、孤独で、何の目的もなく、ただ漫然と生きているだけではとても豊かな生活とは呼べない。人とのふれあいの中で澁刺と活動してこそ、生き甲斐を見出すことができるのである。

このような高齢化を伴った地域社会の崩壊という状況において、筆者は「趣味的サークル」というものに期待をした。この集団は次のような特徴を持っている。第一に集団の参加に拘束力がないこと、第二に個人のプライバシーが確保されること、第三に集団への所属に際して参加者の主体性が存在すること、第四に目的に義務感のような「重たさ」がないことである。つまり、参加の自由は、集団への所属が精神的負担とならずにすむ。また、現代人はプライバシーに立ち入られることを好まないが、参加者が平等である趣味的サークルにおいてはそのような行為を拒絶することができる。所属に際して個人の自由意志が存在すること——伝統的な地域社会と異なって——も、強制を嫌う現代人の考え方に適っている。また、人々の求めるものの変化¹や、経済のゼロ成長、労働時間の短縮などの環境要因も人々を「趣味的サークル」に向かわせると思われる。したがって、この集団はその成員に確固たる準拠枠を与えるようなものではないが、現代に生きる人々の要請に応えることができると思われるのである。

本稿ではこの趣味的サークルについて、平成10年に実施した集団的余暇活動に関する調査の分析をもとに、第一に趣味的サークルへの参加と生活の満足度との関連を、また、第二に趣味的サークルの特徴と存在意義について考察を行う。

2. 言葉の定義について

筆者は「趣味的サークル」を「自発的な参加によって成り立つ、余暇活動を行う小集団」と定義する。余暇活動とは基本的に営利を含まず、「自発的な参加」とはその集団への所属も脱退も個人の自由であることを示している。「小集団」とあるという条件は、趣味的サークルにおいて、成員の間に対面関係と相互作用がとりむすばれていることを意味する。また、紐帯の緩い集団でその成員が快適さを感じる人数は比較的少数であり、結果的にも趣味的サークルは小集団となる。公式な下位の小集団をもたずに集団の規模が大きくなると、内部にインフォーマルな形で派閥ができてしまう可能性が高いからである。このことについては、後に詳しく取りあげる。

本稿において使われる「自発的参加型」の集団は、趣味的サークルの上位概念で、その条件は第一に集団への所属が個人の自由意志によって行われ、第二にその活動への参加についても何ら強制されないことが必要である。具体的には次の集団を想定している。第一に「趣味的サークル」、第二に講師に月謝等を納める「お稽古ごと」、第三に人間性の回復や対人関係の改善・発達を目的とした「エンカウンター・グループ」、第四に「ボランティア・グループ」、第五に「NGO及びNPO」、第六に「宗教」である。この中で今回取りあげるのが集団的余暇活動を行う「趣味的サークル」である。職場における趣味・娯楽のサークル活動及びQCサークルは今回の対象から除外している。いずれも純粋な「自発性」が保証されていないからである。なお、趣味的サークルの活動内容に言及する場合、それを「集団的余暇活動」と呼んでいる。

3. 調査の概要

3. 1 目的と方法

- ・ 調査の目的 「趣味的サークルの参加者は生活の満足感が高い」という仮説をはじめ、ほか5つの仮説を証明する。また、同時に参加者の意識調査も行い、総理府広報室実施の「国民生活に関する世論調査」²、及び同室実施の「社会意識に関する世論調査」³と比較・検討する。
- ・ 調査項目 所属するサークルについての現状や意識（オリジナルの質問項目）
生活一般に関する現状や意識（総理府調査と同一の質問項目）
- ・ 調査対象
 1. 娯楽、余暇活動を目的とする
 2. 営利目的でなく、また営利組織と関わりを持たない
 3. 集団の所属に関して強制力を持たない
 4. 中心メンバーが社会人であること（学生のサークルでないこと）
 5. 2桁以上の会員数で成り立っている
 6. 静岡市に定例の集会所をおく以上の条件を満たす社会集団に所属する会員

調査者は筆者で、調査期間は平成10年8月2日から平成10年9月28日までである。調査方法は、現地にて調査票を配布、記入してもらい、その場で回収した。一部は後日回収となった。調査を行った団体は25で、回収サンプル数391、有効サンプル数378、回収率は78.2%であった。

調査対象とするジャンルの選択にあたっては、まず調査対象とする集団をスポーツ系と文化系の2つのカテゴリーに分けた。その中で集団的に行われる趣味活動で、かつ活動人口の多いジャンルを基本的な抽出の基準とした。そして、それぞれから5つのジャンルを選択し、計10のジャンルを調査対象とした。活動人口の多少については総務庁統計局の「生活基本調査」⁴を活用した。調査を行ったジャンルは、スポーツ系は「野球(3)」、「バレーボール(3)」、「テニス(1)」、「エアロビクス(3)」、「登山(3)」で、文化系は「将棋(3)」、「社交ダンス(3)」、「バードウォッチング(1)」、「コーラス(3)」、「器楽演奏(2)」の合計25団体である。カッコ内の数字は調査を行った団体数である。

3. 2 調査の信頼性について

本調査は「趣味的サークル」に所属している人を対象としたため、純粋な無作為抽出ではない。しかし、調査の信頼性を高めるため、対象の団体を抽出するにあたっては、無作為抽出を旨として行った。したがって、選択肢のなかったバードウォッチングを除いて、基本的には無作為で団体を抽出している。

質問項目の中には、総理府の調査結果と回答を比較するために用意した質問が多数ある。質問文は全く同一であるが、調査の方法において異なる点がある。第一に、総理府が面接調査であるのに対し、本調査は集合調査と留置法の併用になっていること、第二に、調査

を行った時と場が異なっていること、である。調査地点の違いについては、今回調査を行った地域が全体の代表性をもつとは確定できないが、総理府調査の結果を見る限り、全国と東海ブロックとの間に明確な差はなかった。

調査を行った時期の違いについて、本調査の信頼性を高める2つの材料がある。第一に、「生活の満足度」と経済状況との関連である。総理府調査の「生活の満足度」を年ごとに追っていくと、経済状況に関連していることがはっきりと分かる。平成9年から10年にかけて経済の成長率やGDP、失業率、年間所得など、経済状況を示す指標で向上したものは何もない。したがって、本調査における満足度は、前年より低くなっていることはあっても高くなっていることは考えられない。第二に、連合が組合員を対象に平成10年6月に行った生活実態に関する調査⁵を参考にすることができる。この調査によると、2年前に行われたときよりも生活の満足度が著しく低下していることが分かる。以上から、筆者が今回実施した調査と、平成9年の総理府の調査結果における満足度が仮に同様の結果を示したとしても、仮説は立証されることになる。

3. 3 総理府調査とのフェイス・シートの比較

フェイス・シートの項目は、基本的に「国民生活に関する世論調査」と同じである。性別は、総理府調査が男性46.3%、女性が53.7%で、今回の調査では男性52.4%（194人）、女性47.6%（176人）であった。

年齢 ⁶	今回調査	総理府調査
20～24歳	7.3(27)	5.1
25～29歳	13.0(48)	6.4
30～34歳	9.8(36)	7.7
35～39歳	8.2(30)	9.3
40～44歳	9.5(35)	9.8
45～49歳	6.5(24)	12.6
50～54歳	9.5(35)	10.4
55～59歳	13.0(48)	9.8
60歳以上	23.1(85)	28.7

（表中の数字はパーセント、かっこ内は度数。以下同じ）

世帯収入については、今回の調査対象者で年収1,000万円を超える層が22.5%であったのに対し、総理府の割合は13.9%であった。世帯収入が高ければ、個人の可処分所得も高くなることが考えられるので、ある程度、今回の対象者の方が生活にゆとりがあるといえよう。

4. 趣味的サークルと生活の満足度

4. 1 生活の満足度の比較

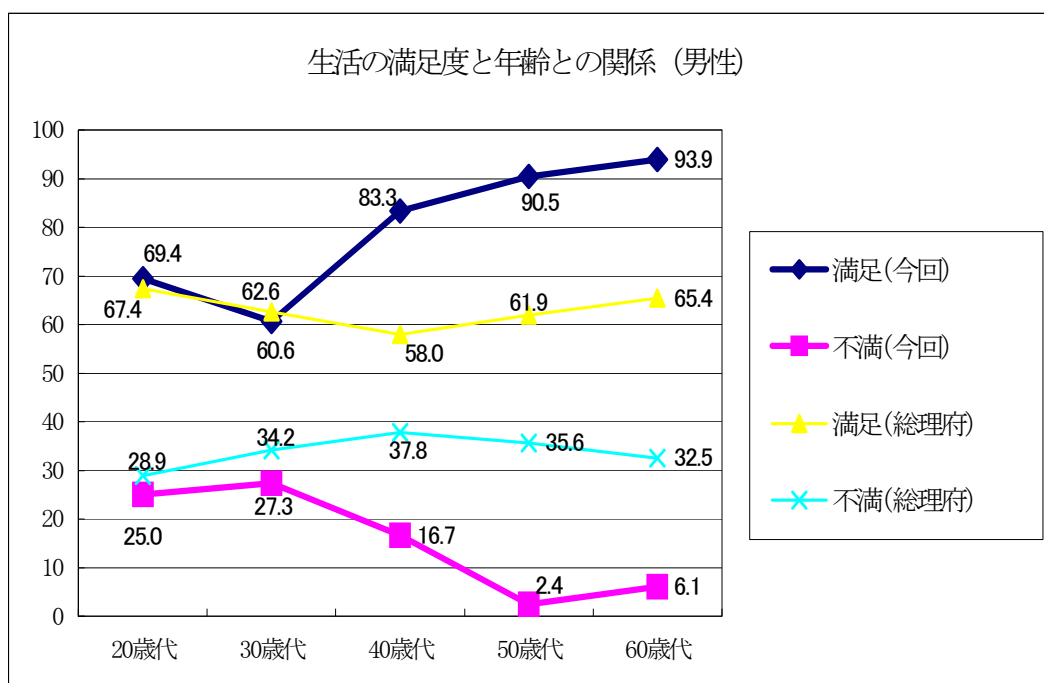
筆者は調査を実施するにあたって、「趣味的サークルの参加者は、参加していない人よりも生活の満足度が高い」という仮説を立てた。この仮説を証明することができれば、趣味的サークルが社会においてある一定の機能を果たしているといえるからである。そこで、次の質問に対する回答を考察する。

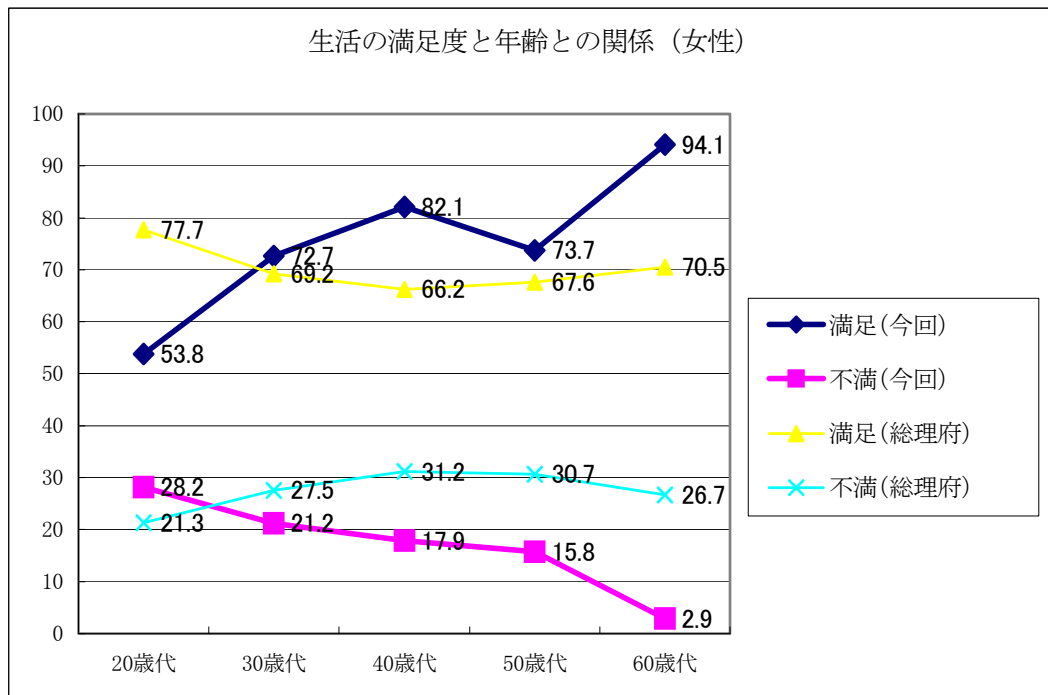
「あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。」

回答選択肢	今回調査	総理府調査
満足している	21.0	9.8
まあ満足している	56.6	56.7
やや不満だ	11.3	22.8
不満だ	4.6	7.8
どちらともいえない	5.1	2.5
わからない	1.3	0.4

単純に比較すると、今回の調査では「満足している」の数値が非常に高いことが分かる。「不満だ」と答えた人も総理府調査の約半分である。また、総理府の調査対象は無作為抽出なので、当然、趣味的サークルへの参加者も一定割合で含まれるはずである。したがって、趣味的サークルに所属する人とそうでない人との差はより大きいものと予想される。

次に年齢と生活の満足度との関係を性別ごとに考察する。



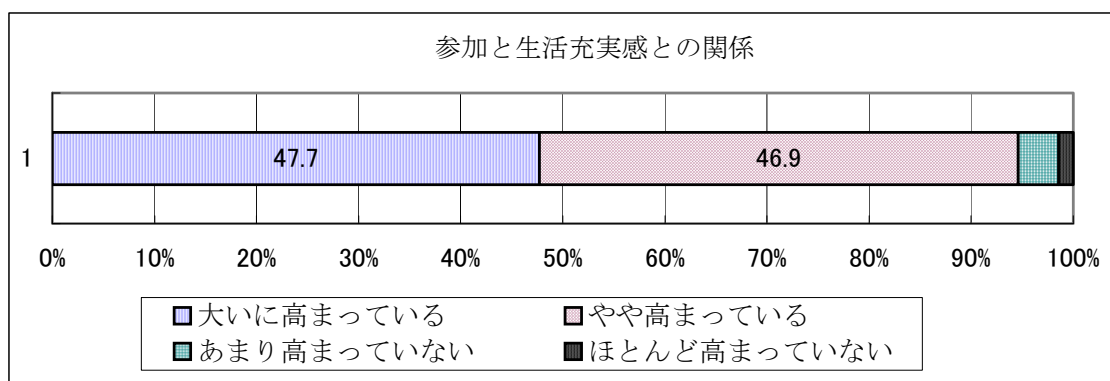


総理府の結果と同様、生活の満足度は年齢によって異なる。しかし、その数値の動きは総理府のそれとはっきり異なっている。総理府の調査では男女とも30歳代から50歳代が満足度の底であるのに対し、今回の調査では基本的に年齢とともに満足度が上昇していくのである。特に40歳代の男性においてその差は非常に大きく、趣味的サークルへの参加が満足度の向上に大きく寄与していることが分かる。したがって、この結果により今回の仮説は証明されたといえよう。つまり、趣味的サークルの参加者は、そうでない人よりも生活の満足度が高いのである。

4. 2 活動への参加と生活の満足度との関連

趣味的サークルの活動への参加と、生活における満足が関係しているかという点についても尋ねている。

「この団体に参加することによって、あなたは生活全体の充実感が高まっていますか。」



参加と生活充実感との関係	有効パーセント
大いに高まっている	47.7 (167)
やや高まっている	46.9 (164)
あまり高まっていない	4.0 (14)
ほとんど高まっていない	1.4 (5)
合計	100 (350)

「大いに高まっている」と「やや高まっている」を合わせると、全体の約95%もの人が活動の参加と生活の充実感との関連を認めている。この結果は、男女、年齢を問わずほとんど変わらない。このことは、人々が生活の満足度を高めるために活動に参加していることを間接的に示しているといえよう。しかし、逆説的に考えると、その活動への参加が自発的である以上、それにより何らかの効用が得られなければ人は離れていってしまうだろう。つまり、その人が自らの意志でその活動に参加しているということは、活動により何らかの喜びや充実感を得ていると考えて間違いのないのである。

4. 3 参加の目的

趣味的サークルへの参加の具体的な目的を知ることは、参加者がどのような満足感を求めているかを考察するうえで必要である。これに関する質問は、9つの項目からなる目的の「重要度」を尋ねた質問と、その趣味を集団で行う理由を尋ねたものの2つがある。

前者は、①豊かな人間関係・仲間との交流、②技術・能力の向上、③趣味に関する情報交換、④自由時間の有効活用、⑤生活に変化を与える、⑥異性との出会い、⑦同じ趣味をもつ仲間との出会い、⑧活動そのもの、⑨その他の目的、から成っており、それぞれ4段階で重要度を尋ねている。この中で重要度の上位2つ（「とても重要」、「ある程度重要」）を合わせた値が90%を超えたものは4つで、それぞれ①(92.7%)、②(92.3%)、⑦(94.0%)、⑧(94.2%)であった。この結果は、人とのふれあいに関する項目と活動に関するものに大別できる。ここから読みとれることは、活動への参加は、活動自体の魅力と仲間との協同という2つの要素から成り立っているということである。

後者は、「あなたはなぜこの趣味を個人ではなく、集団で行うのですか。」(複数回答)という質問に対して、次のような回答選択肢を用意した。①個人ではできないから、②話の合う仲間がいるから、③仲間と喜びを共有したいから、④お互いに刺激を受け、技能や技術が向上するから、⑤趣味に関する知識や情報が増えるから、⑥その他、である。この中で①の「個人ではできないから」を除くと、上位2つは、④(49.7%)と③(44.9%)であった。ここでも前の質問と同様、活動そのものと人とのふれあいがポイントとなることが分かる。

5. 趣味的サークルの特徴とその存在意義

5. 1 小集団としての趣味的サークルと規模の決定について

調査を実施したところ、「趣味的サークル」は実際に小集団であることが分かった。趣味のジャンルによっても異なるが、活動が30名を超えることは稀である。たとえ団員が50名いたとしても、実際の参加人数は20名から30名になることが多い。つまり名簿上の人数が多くても、いわゆる「幽霊団員」が多数含まれたり、低い参加率のもとで参加者が入れ替わったりして、活動人数は上述の数に落ち着くのである。今回の調査で例外となったのはテニス1団体と、器楽演奏2団体である。しかし、前者の規模は120名と趣味的サークルとしては巨大だが、集団内に公式の下位グループを形成しており、小集団の集まりとして全体が成り立っている。後者は活動上ある一定の人数を必要とし、また同時に集団内に何らかの小グループ（楽器ごと、または木管、金管など）を必然的に形成している。具体的には、器楽演奏2団体のうちのひとつが62名で、もうひとつが86名であった。そして前者が吹奏楽、後者がオーケストラであった。オーケストラの方が吹奏楽よりもパート数が多いことはいうまでもない。したがって、これらにの団体の成員が多かったことは、必ずしも小集団としての例外と考える必要はないであろう。また、バードウォッチングの集団も名簿上の人数も非常に多かった（660名）が、実際に集団として活動している人数は先述の範囲（毎回の出席者は30名前後）に収まっていた。

趣味的サークルが小集団を形成する理由として、ここで新たに「快適人数」と「必要人数」の概念を導入する。快適人数とは、人が集団の中で活動していてストレスを感じない人数のことである。あまり人数が少ないと個人同士の人間関係がすべてになってしまったり、逆に人数が多すぎると成員個人が匿名化され疎外感を味わったり、安定が得られず内部に派閥が発生する可能性がある。この問題を解決している見事な例が先ほどのテニスサークルである。全体としての規模は大きいですが、内部を10の小グループに分割し、各グループにリーダーをおくことで集団としての統一を保っているのである。

必要人数とはその活動を行う上で物理的かつ現実的に必要な人数を示し、必要不可欠な規定人数とは異なる。例えば、ルール上は野球なら最低9人、バレーボールなら6人いればゲームを行うことはできる。しかし、実際に集団として趣味活動を行うためには、この人数では不可能である。趣味的サークルの活動に常に全員が集まることはあり得ないし、ゲーム中は交代要員も必要である。スポーツだけではない。音楽サークルでも、スコアにあるパートの数だけの人数で行うことは、演奏上さまざまな制約を受けるためまず考えられない。したがって、必要人数とは規定人数を若干上回った「現実的な活動に必要な人数」のことを指している。

しかし、趣味的サークルにおいて、スポーツにしても音楽の演奏にしても必要人数が規定人数を大幅に上回ることはない。それでは個人の活躍の場が減ってしまうからである。音楽の演奏でも人数が多すぎればバランス上、出番が減らされてしまうし、スポーツにいたってはまったく出番がないことも十分にあり得る。したがって、必要人数が規定人数（活動上、不可欠な最低人数）の2倍になることはほとんどなく、現実的には規定人数の2、3割増しが必要人数として安定したところである。

必要人数はその性質上、具体的な人数について言及することが可能である。しかし、快適人数について述べることは非常に難しい。文献によるとインフォーマル・グループの人数は、15から20人程度という。青井は小集団の規模について次のように述べている。「サ

ークル活動の多様性を保持し、資金を確保するには会員数の多いほど有利なわけであるが、結束を強め、質的向上をはかるためにはやはりあまり会員数を多くしない方が望ましい。事実、名目的な会員ではなく、同時に活動に参加している人数は、どのサークルでも 15、16 名が限度 (青井 1980 p.4)」という。また、ジンメル (Simmel 1968=1972 p.35) は『『社交』をなりたたせるには、どれだけの人びとを招待しなければならないのであろうか』という問いに対して、「われわれにもっとも親しい人間を 15 人ぐらい一緒に招待すれば、そのばあいはたしかに『社交』が生じるのである。たとえ個々のばあいの数の大きさが、諸要素のあいだの関係の性質と緊密さに依存していることももちろんであるにしても、つねに数は決定的なものであり続ける」と述べている。今回の調査によって結論を見出すことはできないが、男女混合の集団と同性によって構成される集団とでは快適人数が異なると思われる。

ここで指摘が必要なことは、「必要人数」と「快適人数」の適用はその集団の活動内容によって決定されることである。必要人数の概念は集会的に行われる活動に適用される。つまり、野球やバレーボール、オーケストラや合唱など、ある一定の人数を必要とする趣味の活動である。一方、快適人数の概念は個人的な趣味の集団に対して有効である。個人的な趣味とは将棋や社交ダンス、登山やエアロビクスなど、一人、もしくは二人いれば活動できる活動を指している。これらの集団は必要人数の影響を受けないために、集団の規模はその参加者が快適か否かによって決定される。したがって、いずれの集団も必要人数、または快適人数の影響を受けることにより、集団として安定的な規模に落ち着くものと考えられる。

5. 2 趣味的サークルの非日常性と準拠枠について

趣味的サークルはその成員に確固たる準拠枠を与えられないことはすでに述べた。その理由は趣味的サークルが非日常世界の活動だからである。マートンのいう準拠集団は現実には人々が生活する日常世界での適応が前提となっている。したがって、彼の定義において趣味的サークルは準拠集団とは成り得ないし、またその成員に準拠枠も与えることはできないのである。しかし、活動に参加している人は自らの集団をととても大切に思っているし、人によっては重要な自己実現の場となっていることも事実である。そのような人にとって、その集団は準拠枠的な何か——行動規範とまではいかなくとも、生活の満足感や精神的な支えなど——を与えてくれるものなのである。

それでは、趣味的サークルの非日常性とは何であろうか。それは、その活動が日常の活動と「時」、「場所」、「秩序」を異にする点である。つまり、余暇時間に、決められた場所に集い、その集団のルールに従う、これはまさにホイジンガのいう「遊び」(Huizinga 1938=1989)である。趣味的サークルの活動はこの「遊び」であり、そしてそれは明らかに非日常世界の活動なのである。非日常世界の「秩序」とは、その集団にある会員規則のことを指しているのではなく、日常世界の常識や属性がその世界内で同様には機能させない独自の規制のことを指している。例えば、会社の重役が野球チームにいたところで、打って、守って、走らなければその人はその「場」で活躍することはできない——職場のサークルではこの通りにはならないであろう——はずである。弁護士が何と主張しようとも楽器か

ら音が出なければ演奏会には出させてもらえない。仮に趣味的サークルの中に年功序列があったとしても、それは参加年数によるものであり、単に年が多いだけでは到底主張は受け入れられない。男女の関係についても同様である。日常で起こり得る男女差別の問題は、趣味的サークルでは考えにくい。一旦その世界から離れて現実世界に戻れば別々の様々な役割を持った人々も、趣味的サークルの中では特別な秩序に則って活動するのである。

5. 3 社会における趣味的サークルの位置づけ

これまで趣味的サークルの果たす役割とその特徴をみてきたが、ここでは、社会というシステムの中でその集団をどのように位置づけることができるか検討したい。

今回、趣味的サークルにおける高齢者の満足度は非常に高いものであった。また、他の調査でも同様の結果が出ている⁷。高齢者における趣味活動が生活を豊かなものに行っていることは間違いない。物質的に満たされた今日、生活（人生）をより充実したものにするポイントは、フェイス・トゥー・フェイスで行われる豊かな人間関係であると筆者は考える。仕事から引退し社会とのつながりが希薄になりがちな高齢者にとって、他の人々とふれあうことができる趣味的サークルは、生活の質を高めるための大きな可能性を与えてくれる。また、参加形態が緩やかな趣味的サークルは高齢者の活動として適している。以上のことから、今後の「高齢社会」において高齢者の生活の「質」を高めるという意味で趣味的サークルは重要な役割を果たすであろう。

次に市民社会との関係について考える。少なくとも投票行動を見る限り、趣味的サークルの参加者の投票率は非常に高く⁸、市民としての義務を果たしている。したがって、デュマズディエが表明した「市民社会の形成を阻害する」⁹との懸念は当てはまらないことが分かった。趣味的サークルに参加している人は、そうでない人よりも、より多くの社会集団に属している。集団に所属するという事は、それだけで社会活動に参加することになる。このことが社会とつながっているという感覚を人々に芽生えさせるとしたら、趣味的サークルは市民社会の形成にある一定の貢献をすることになる。

最後に地域社会との関わりについて検討する。私の定義する趣味的サークルとは成員の定期的な対面接触を前提としている。電子的なネットワークが発展した今日、パソコン上で様々なグループを形成している。しかし、これは私の考える趣味的サークルではない。希薄になった人間関係を再構築するためには、他人と時と場を共有する必要があるはずだ。そこで趣味的サークルと地域社会との関係が重要になってくる。趣味的サークルは人々が空間を一にするため、その活動範囲がある程度限定されている。また、音楽であれ、スポーツであれ、その上位組織に加入することは、相対的に自らの地域を意識させられることになるし、また何らかの全国大会になれば、出場する集団は地域の代表ということになる。したがって、趣味的サークルはその構造上、必然的に地域社会と関係を持つことになる。このことは、これからの社会にとっても非常に有用なはずである。趣味的サークルは希薄になった地域における人間関係を豊かにする機会を常に人に与えているのである。自分の住む地域に愛着を持ち、そこで仲間とふれあい、活動をすることは、人々の生活の満足感を間違いなく高めるはずだ。趣味的サークルは地域社会の活動の一つとして、比較的気軽に参加でき、生活を楽しむことができるという意味での重要な選択肢の一つなのである。

6. おわりに

筆者の興味の源泉は現代社会における「豊かさ」の問題にあった。豊かさには様々なものがある。食物が豊富にあるという意味の豊かさもあれば、人間関係の豊かさもある。高価なものがあることも豊かさであれば、人生の豊かさというものもある。また、豊かさは各個人によっても異なる。人の考えがそれぞれ異なるように、人によって感じる豊かさは異なる。筆者はその中で人とのふれあいという心の豊かさを重要だと考えた。人との関わりの中で豊かさを感じるという考え方は筆者の信念でもあるし、それが多くの人々にとっての豊かさにも適用可能であると考えている。

それでは、どのようにすれば「心の豊かさ」を得ることができるのであろうか。「物の豊かさ」は分かりやすい。たくさん働いて、お金を手にすれば満たすことができる。しかし、心を豊かにするのはそのように単純ではない。例えば、海外旅行をすればよいのか。確かに心は満たされるかもしれない。しかし、この行為は立派な消費活動である。したがって「物の豊かさ」の範疇に入れることも可能だ。資本主義社会において何らかの行動をすると、ほとんどの場合お金が必要であり、経済的行為を伴うことになる。だから、「心の豊かさ」にもある程度お金がかかるのは当然である。しかし、コストとともに効用が上昇する行為は基本的に経済活動であり、「物の豊かさ」なのである。したがって、「心の豊かさ」とはより精神的な活動を想定しなければならない。

そこで思い浮かぶのは「創作」と「鑑賞」である。いずれも高度な精神活動であるし、心を豊かにするものと考えてよさそうである。しかし、私はここでもう一つ、重要なものを挙げておきたい。これまでも述べているが、それは「人とのふれあい・豊かな人間関係」である。人と「ふれあっている」という感覚は、人の心を満たすうえでとても大切な要素である。反対を考えてみると分かりやすい。ある種の達成感を孤独な状態で得たとしても非常に寂しい感じがする。喜びや感動を他の人と分かち合っただけでこそ本当の喜びがあるのではないだろうか。

しかし、人間関係というものは時には煩わしく、負担になることもある。そこで、筆者は研究対象として趣味的サークルを取りあげたのである。何の拘束力を持たない趣味的サークルは、人々に人とふれあう機会だけを与え、やっかいな人間関係までは押しつけてこない。また、仲間とともに一つの物事に取り組み、達成した感動を人と共有することができる。これこそ「心の豊かさ」であると私は考える。それは社会が物質的に豊かであるかどうかとは関係がない。しかし、伝統的な地域社会の解体や準抛卒の喪失、そして様々な事件が起こる殺伐とした現代にこそ必要な「豊かさ」なのである。

「豊かさ」の問題は、個人的もあり、また社会的でもある。この捉えることの難しい問題に対して、趣味的サークルの果たす役割を想定して、今回、社会調査という手法を用いたのである。本稿では調査の分析から趣味的サークルと生活の満足度との関係、及び趣味的サークルの特徴と存在意義を考察してきた。以上から趣味的サークルは、これからの日本社会、すなわち高齢社会やゼロ成長時代にこそ人々の豊かさに大きく関わり、またその果たす役割が期待されるものである。

1 総理府調査「国民生活に関する世論調査」(平成9年5月実施、詳細は第五章の脚注を参照)において、次のような結果がある。「今後の生活の仕方として、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどちらでしょうか。」

(56.3%) 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい(物の豊かさ)

(30.1%) まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい(心の豊かさ)

昭和54年に逆転して以来、一貫して心の豊かさが物の豊かさよりも優勢で、その差は拡大傾向にある。以上の結果は、人々の考え方が心の豊かさを求める方向にシフトしていることを表わしている。

2 総理府広報室「国民生活に関する世論調査」平成9年5月29日～6月11日実施、調査員による面接聴取。層化2段無作為抽出法。有効回収数7,293人、有効回収率72.9%。

3 総理府広報室「社会意識に関する世論調査」平成9年12月4日～12月17日実施、調査員による面接聴取。層化2段無作為抽出法。有効回収数7,110人、有効回収率71.1%。

4 総務庁統計局「平成8年社会生活基本調査」平成8年10月1日現在で実施。約9万9千世帯に居住する10歳以上の世帯員約27万人を対象とする。

5 連合の調査結果は「日本経済新聞」1998年10月29日朝刊を参照。この調査は1988年から隔年で実施しているもので、平成10年は加盟組合員44,000人を対象に行い、25,029人から回答を得ている。生活の満足度では「非常に不満」、「やや不満」の合計60.2%(前回は36.4%)に対し、「十分満足」、「まあまあ満足」の合計は38.8%(前回は62.7%)であった。この結果が示すように、2年前から生活の満足度が格段に低下している。2年前の結果について総理府のものと比較してみると、総理府調査における生活の満足度は69.9%だったのに対し、連合の調査結果は62.7%である。これは、連合の調査結果の方が満足度が低く出てくる可能性を示している。しかし、仮にその差(7.2%)を今回行われた連合の調査結果に加えたとしても、生活の満足度は46.0%で、比較に用いている平成9年調査の66.5%よりも大きく落ち込んでいる。

6 総理府調査は5歳区切で80歳まで尋ねているが、今回調査において60歳以上は1つの選択肢にまとめられている。そのため、表中の総理府調査の数字は60歳以上を合計したものである。

7 「生活者一万人アンケート調査」から、高齢者における趣味活動と生活の満足度との関連が次のように導き出されている。「趣味と生活満足度との関係を見ると、60歳以上の定年退職者にとっては、趣味の有無が生活満足度に大きな影響を及ぼしていることがわかる(野村総合研究所1998 p.202-203)」。また、「趣味の多さが生活満足度の高さにつながるのは、(中略)趣味を通じて人と交流することも生活満足度を高める大きな要因なのではないだろうか(前掲書1998 p.204)」と述べている。

8 平成10年7月に行われた参議院選挙の投票率は、趣味的サークルの参加者で79.7%(この中には試合で参加できなかった団体の数値も含まれていて、その団体を除外すると81.7%になる)あり、この時の静岡県(調査対象者の中には静岡市以外に住んでいる人もいるので、比較の対象は県単位になる)の投票率、57.47%を大きく上回っている。年齢の上昇とともに投票率が上がる傾向は一般の投票行動と同じであるが、すでに30歳代から静岡県の投票率を上回っている。そして、50歳代を超えるとそれは9割を超えている。

9 デュマズディエは次のように述べている。「余暇は民衆の新しい阿片なのだろうか。そうだとすれば労働者を『疎外から享楽へ』導こうとする運動は、余暇における享楽の埋め合わせに、労働の場における疎外を強化させようとする反対方向の力と衝突することになる(『Dumazedier 1962=1972 p.36』)。

参考文献

青井和夫 1980 『小集団の社会学』 東京大学出版会

綾部恒雄 1988 『クラブの人類学』 アカデミア出版会

Cooley, Charles Horton 1962 *Social organization: a study of the larger mind*, Schocken Books=1970
大橋幸ほか訳 『社会組織論』 青木書店

Simmel, Georg 1968 *Soziologie: Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot=1972 堀喜望ほか訳 『集団の社会学』 ミネルヴァ書房

Dumazedier, Joffre 1962 *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil=1972 中嶋巖訳 『余暇文明へ向かって』 東京創元社

野村総合研究所社会・産業研究本部 1998 『変わりゆく日本人』 野村総合研究所

Huizinga, J. *Verzamelde Werken 1938 Homo ludens: Proeve eener bepaling van het spel-element der*

cultuur.=1989 里見元一郎訳 『ホモ・ルーデンス』 河出書房新社

Merton, Robert K. 1949 *Social theory and social structure: toward the codification of theory and research*, New York, The Free Press

Roger, Caillois 1967 *Les jeux et les hommes*, édition revue et augmentée. Gallimard=1990 多田道太

郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社